

かんろだいの石普請について、『稿本天理教教祖伝』（以下『御伝』という）の158頁に、

明治十四年春以来、かんろだいの石普請は順調に進み、秋の初めには二段迄出来た。第十七号には、元のぢばの理を詳らかに述べ、人間創造の証拠として、元のぢばにかんろだいを据えて置く。この台が皆揃いさえたならば、どのような願もかなわぬという事はない。その完成までに、確り世界中の人の心を澄ますように、と、明るい将来の喜びを述べて、胸の掃除を急込まれた。

と述べられています。

しかるに、その次に、「しかし、その直後思いがけない事が起った。石工七次郎が突然居なくなったのである。測らずも、石普請はこゝに頓挫した」とあるように、希望に満ちて取り組んだ石普請が、道半ばであっけなく挫折してしまっているのです。

教祖伝史実校訂本下一（『復元』第37号参照）には、この石工横田七次郎の逃走の原因として、①石工がかんろだいの石を削る時に欠けさせてしまった、②石工が大酒飲みであちこちに借金をつくって逃げざるをえなかった（高井猶吉談）、③石工がなまくらで働かなかった（宮森與三郎談）などの説が記されていますが、④七次郎が警察へ連れていかれて、そのまま留置所で病死した、との子孫の後日談も伝わっていて（『みちのとも』昭和57年2月号参照）七次郎がいなくなった真相は明らかではありません。

しかし、それにしても、石工が一人いなくなっただけで、なぜ「おふでさき」でも急き込まれている“かんろだい”の建築が頓挫してしまったのか。七次郎がたとえどんな理由でいなくなったとしても、他の石工の手配はできなかつたのか？ という疑問が残ります。「甘露臺石工入用帳」（『復元』第37号参照）にも、雁多尾畑村横田七次郎の隣りに藤村石工石原巳之助の名が見られますが、神社仏閣が多い大和地方には、他の地方よりは多くの石工がいたと思われる。すなわち、河内からの石工が一人居なくなつたくらいで、なぜその当時の本教の総力を挙げて始まつた事業が頓挫してしまったのかと思えるのです。

さらに申せば、本格的な石出しが終つたのは明治14年の5月21日頃だと思われます。そして、9月17日に二段ができた（梅谷四郎兵衛手記及び山澤良治郎就一御尋手続上申書）ということですから、二段を作り終えるまでに4カ月程度かかっていることとなります。二段で4カ月もかかれば、もしその後作業が順調に進んだとしても、残りの十段を完成するのは何日になったのか。そのことを誰も心配しなかつたのだろうかという疑問も残ります。

また、かりに石を欠いた事実があつたとしても、同年の9月25日に2回目の石出しをしている記録もありますから、やり直しをするのは不可能ではなかつたとも考えられます。教祖のお急き込みによる“かんろだい”の石普請を、なぜ頼りない石工とその手下だけに任せておいたのか。なぜもっと多くの腕の利く石工を手配しなかつたのか不思議に思えるのです。

この“かんろだい”の石普請頓挫の理由については、『御伝』158～159頁には「人々の心の成人につれ、又、つとめ人衆の寄り集まるにつれて、かんろだいは据えられる、(…)護摩の煙に燻つて、澄み切るには未だ早い実情であつたと言えよう。それを思えば、この思いがけないふしも、実は、余りにも成人の鈍い子供心に対して、早く成人せよ、との、親心ゆえの激しいお急込みであつた」との記述があります。

しかし、具体的に誰に対して「早く成人せよ」と急き込まれたのか。その答えは容易には見つかりません。もし、それが側な者だつたとすれば、『御伝』の156頁に、明治14年当時常にお屋敷にいた教祖以外の人として、まつゑ、眞之亮、たまへ、梶本ひさ、仲田、辻、高井、宮森（増井りん、飯降さとと子供もお屋敷に住み込んでいたはずだが、ここには記されていない）などの人々の名前がありますが、しかし、これらの人々の成人がそこまで遅れていたのだろうかという思いがします。

あるいは、成人が鈍いというのが、教勢の伸展についてのことをいうのなら、『御伝』の159頁に、「この頃には、講の数は、二十有余を数えるようになった」とありますし、また、2代真柱様の『ひとことはなし その二』の「甘露臺石造の顛末」にも、明治14年5月から10月までに総計84件103円91銭の寄付があつたことが紹介されると共に、「此の寄附帳によって考ふるに、其の當時の天理教全勢力たる大和、河内、大阪、播磨等の講社が一丸とり、云はゞ全教あげて一團結となつて此のふしんにかゝつたものと思われる。遠いものは寄附をして、近いものは日々に寄進に奉仕して、何れも一つ心になつて、神意達成に努力した事はうたがへない、甘露臺の出現、それこそ我等信ずるものにとっては一日も忘れられぬ事であり、その出現によってすべての親神様の残念は、はれるものであるとの信念は、實に強かつた事であろう。」と述べられているように、御供の額もひのきしん者の数も、石普請をきっかけに格段に増えています。教勢はこの頃にはむしろ急激に伸展していたと考えられるのです。

そして、さらに申せば、護摩の煙に燻っていた（官憲の干渉に対する応法の道を考えていた）のは、石普請が始まる前から明らかだつたのですから、そのことが障害になるのであれば、最初からことを起こさねばよかつたではないかとも思われます。あるいは、その官憲の干渉にしても、かんろだいの石普請が始まつた1カ月後の6月に巡査がお屋敷に出張した時には咎めを受けなかつたし、9月のふしは止宿人届を怠つたことが原因でした（届出が遅れたのは参詣人の急増が原因であり、教勢発展があつた証拠である）。また、二段までの石が出来た以後の10月の御苦勞も、多数の人を集めて迷わすという理由であり、翌明治15年2月の御苦勞も、かんろだいの石普請を直接咎められたものではありませんでした。実際にかんろだいの石二段が官憲に没収されたのは、同15年の5月12日ですから、二段までが完工して以後8カ月も後のことです。ですから、官憲の妨害＝人間社会の成人不足ということが、石普請が頓挫せざるをえなかつた直接の原因だということも、少し説得力に欠けるように思うのです。（次号につづく）